福岡組 検索

仏様のおはなし新シリーズ第１０８集「永遠不変の言葉」

私たちは日ごろ多種多様な言葉を使って日暮らしをしていますが、その中に若者言葉と言われるものがあります。その若者言葉の中には意外な歴史を持つものがあります。

「うざい」という言葉は、東京の多摩地区の方言でしたが、１９６０年代に東京の若者言葉になりました。子どもにいつ頃から「うざい」を使いだしたか聞いたところ、小学校高学年からと答えました。それで福岡では12・3年前から使われるようになったようです。多摩地区の方言が５０年かけて日本中に広まった訳です。

「まじ」は江戸時代の芸人が使う楽屋言葉だったそうですし、「やばい」は江戸時代の盗賊が使う隠語だったそうです。

「むかつく」は平安時代から使われていた言葉で、本来の意味は胸やけ・吐き気を催している状態を指すものでしたが、現在は「腹が立つ」という意味で使われるようになりました。

「びびる」も平安時代の言葉ですが、その語源は鎧を付けた武士が大勢集まった時、鎧の金具同士が触れ合って「びーんびーん」という音が響くことから使われるようになったそうです。

このように言葉は時代と共に意味合いが変化していくものが多いですが、絶対に意味合いが変化しない言葉があります。

それは南無阿弥陀仏のお念仏です。浄土和讃に「弥陀成仏のこのかたは　いまに十劫をへたまえり」とありますように、阿弥陀如来が十劫という永い間、「わたしにまかせよ、必ず救う」と呼び続けて下さったからこそ、私の命に染み込む程の歴史があったからこそ、今も変わることなく声の仏として私の口から出てくださっています。

法泉寺　佐々木一明